

故深沢宏教授経歴年譜

昭和六年（一九三一年）

十月九日

深沢重次郎・同キタの次男として、山形県酒田市に生まれる。本籍地は秋田県横手市。後に、新庄市等を経て家族と共に大連に移住。

昭和二十三年（一九四八年）

濟々饗（熊本県）に編入学、横手中学（秋田県）等、数度の転校。

昭和十二年（一九三七年）

四月

大連市富士小学校入学

三月

濟々饗（熊本県）卒業

四月

東京商科大学商学専門部入学

昭和十六年（一九四一年）

四月

大連市上霞国民学校転入

昭和二十四年（一九四九年）

同第一学年終了

一橋大学経済学部入学

昭和十九年（一九四四年）

三月

同国民学校卒業

昭和二十八年（一九五三年）

三月

同卒業

四月

大連市大連中学校入学、一年修了

四月 一橋大学大学院経済学研究科修士課程入学

昭和二〇年（一九四五年）

四月

陸軍幼年学校（広島）に入学、終戦を迎える。

昭和三〇年（一九五五年）

三月

同修了

四月 一橋大学院経済学研究科博士課程入学

(昭和四一年三月まで)

昭和三一年(一九五六年)

昭和四一年(一九六六年)

七月 インド・ラクナウ大学経済学研究科博士課程入学(インド政府給費留学生)

三月 浅葉尚一、久代の長女智子と結婚する。
七月 社会経済調査及び経済史研究のため、インド、セイロン、連合王国に出張。

昭和三四年(一九五九年)

昭和四二年(一九六七年)

三月 同課程修了

九月 帰国

昭和三五年(一九六〇年)

昭和四三年(一九六八年)

一月 インド・ラクナウ大学ドクター・オブ・フィロソフィー学位取得

二月 一橋大学経済学部助教

昭和三七七年(一九六二年)

昭和四四年(一九六九年)

三月 一橋大学院経済学研究科博士課程単位修得

十月 東京外国語大学外国学部に併任。

四月 一橋大学経済学部講師

(昭和四六年三月まで)

七月 東南アジア諸国の社会、経済調査研究並びに資料収集のため、カンボジア、タイ、マラヤ、シンガポール、インドネシア、パキスタン、インド、セイロン、香港に出張。

昭和四六年(一九七一年)

十月 帰国

一月 第二八回国際東洋学者会議出席及びインドネシア経済研究のため、オーストラリア、インドネシアに出張。

昭和三九年(一九六四年)

昭和四七年(一九七二年)

四月 東京都立大学講師(非常勤)に委嘱される。

一月 帰国

五月

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究員（インド村落共同体の研究）に委嘱される。（昭和四九年三月まで。）

『インド社会経済史研究』（東洋経済新報社）の刊行。

十月

一橋大学経済学部教授

十一月

『インド社会経済史研究』に対し、日経・経済図書文化賞を受ける。

昭和四八年（一九七三年）

四月

日本女子大学非常勤講師に委嘱される。（昭和四九年三月まで）

五月

長男祐の誕生。

昭和四九年（一九七四年）

四月

西南アジア及び南アジア地域の経済研究のため、イラン、トルコ、シリア、レバノン、ヨルダン、エジプト、サウジアラビア、イラク、アフガニスタン、パキスタン、インド、バングラデシュ、ビルマ、タイ、ヴェトナムに出張。

昭和五〇年（一九七五年）

三月

帰国

十一月

財団法人アジア政経学会常務理事（昭和六〇年

十一月まで）

昭和五一年（一九七六年）

八月

日本・イラン合弁企業の実態調査のため、イランに渡航。

九月

帰国

十二月

日本の文化・社会に関するシンポジウムに出席し、東南アジア経済研究のため、バングラデシュ、インドに出張。

昭和五二年（一九七七年）

四月

成蹊大学講師に委嘱される。（昭和五二年四月～五四年三月、五六年四月～五七年三月、六〇年四月～六一年三月）

五月

第二回ニュージランド・アジア学会に出席のため、ニュージランド、オーストラリアに出張。帰国

昭和五三年（一九七八年）

四月

亜細亜大学非常勤講師に委嘱される。（昭和五七年三月まで）

昭和五四年（一九七九年）

四月

一橋大学評議員に併任。

昭和五五年（一九八〇年）

二月 学術審議会専門委員（科学研究費分科会）に任

命される。

四月 東京大学経済学部講師に併任。

（昭和五五年四月～九月、六〇年四月～六一年

三月）

昭和五七年（一九八二年）

三月 独立後西部インドにおける農業発展と社会変動

に関する研究・調査及び諸外国における南アジ

ア研究の動向調査のため、合衆国、連合王国、

ドイツ連邦共和国、トルコ、インド、タイに出

張。

昭和五八年（一九八三年）

四月 一橋大学経済学部長に併任。（昭和六〇年三月

まで）

九月 深沢宏訳によるマックス・ウェーバー『世界諸

宗教の経済倫理Ⅱ ヒンドゥー教と仏教』（日

買出版社）の刊行。

昭和六〇年（一九八五年）

十一月 財団法人アジア政経学会理事

昭和六一年（一九八六年）

六月 『インド断章』（自费出版）の刊行。

八月二六日 都立府中病院にて、肝不全のために死亡。享年

五四歳